

本質を反省してもう一つ別の理由が考えられはしないであろうか。

一體奴隷労働は如何なる土地に用いられたであろうか。我々が Coto, Varrio, Columella の農業書を読みとき、著者が認められている如く最も利益の多き土地即ちオリブ園や葡萄園であることは少しく羅馬の經濟史を學んだものの齎しく認める所である。即ち奴隷労働がかかる圃圃に使用されると言うことは奴隷が物として優れて經濟的意味を持つていと言うことである。然るに Columella のある「重要」な記事が書かれた紀元六一―六五年頃イタリヤは一體羅馬世界内に於いて經濟的に如何なる地位を占めていたであろうか。Rosovitzelf の言葉を用うれば所謂「經濟的遠心化」の行われつつあつた時代であり、それより約二十年後には Dominicus のあの有名な勅令が出されたことを思い出さねばならない。紀元前一世紀には世界の政治經濟の中心地であつたイタリヤはオリブ油、葡萄酒を各地に輸出して居たが、紀元後一世紀はその輸出力衰退し、イタリヤの經濟狀

態は苦境に陥りつつあつたとき、奴隷制から小作制への轉換はイタリヤ半島が羅馬世界に於ける經濟力の變動に關係していると言ふことが考えられはしないであろうか。(昭和二十四年七月日本評論社刊 A 一五六頁社會構成史大系第二卷所收)―淺香正一

増田 四郎 著

西歐市民意識の形成

ヨーロッパの歴史を古代・中世・近世に分ち、その各々を一つの完結せる時代として把握した既存の體系は、今世紀に入つてからは特に社會經濟史的な面から崩され、就中中世社會制度の實證的研究によつて強く促された。光明と自由に満ちた古代と近世の「中間に介在する」暗黒と束縛の中世という觀念は批判を受け根本的に修正されつゝあるのであるが、此の様な歴史觀の變動は更に近代ヨーロッパ文明の危機没落という現代西歐人の不安感と絡み合い、ヨーロッパ史の再批

判はもはや中世の意義を單なる不自由とか非文明として處理し難い再認識を切實に要求し、ヨーロッパ史の時代區分は再構成を見なければならぬと言われる。されば中世の位置づけは西洋史全體の理解と不可分に結合するものであり、その個別的研究所も、斯かる課題の核心への執拗なる肉迫を要求されて來るのである。

本書第一論文は謂わば後に續く諸論の序説をなすものであるが、上述の如き西洋史學一般の大きな課題に對する強い關心が示されて居り、我々は著者の視野の廣さと深さを知るのである。著者はその二十年に亘る中世史研究、殊に中世北歐都市の個別的實證的研究を通しすぐれた業績を學界に送られたのであるが、今「時代分けの問題」をば轉換期の歴史意識との關聯にひつかけて再検討しようとの構想を持たれ、具體的には、中世から近代への轉換に着眼されて、マッシーヴな中世都市を中心とする市民社會意識の追及にその焦點を合わせざる事の正當性を主張して居られるようである。此の様な

意圖の下に著者はこれ迄累積せられた研究を總括せられ、其處から再び新たな展望を以て進まれようとするものと考えられるのである。従つて本書は氏の既刊の名著「獨逸中世史の研究」・「ヨーロッパ社會の誕生」に見られる精緻な實證的研究が凝縮されて居るものと見て差支えなからう。

第二論文はマックス・ウェーバーの都市研究の態度を省察し、都市外勢に對する排他性・東洋的「魔術的制約」から解放された「個人の誓約團體的結合」という北歐型中世都市の理想型を抉出する事により、「プロテスタントイイズムの倫理と並んで、近代資本主義を育成した素地の究明」即ち「公共的世界に奉仕する市民の精神的訓練の『場』を問」う立論の方法を指摘して、北歐中世都市の意識の根柢に、直接的ではないが近代市民意識の精神的中核たるデモクラシーの母胎を見よとされて居る。

かくて我々は前述二論文の展望的な構想について、本書中の力點であると思わ

れる第三、第四の論文に入るのであるが、著者の分析は益々精密になされ、此の北歐型中世都市のトレーガーを商人ギルドに求めた前論文の態度を極めて手堅く、すぐれて實證的に論述されて居る。又中世社會の理解に際し、莊園支配の經濟に對し「都市商工業者を對象とする領主の貨幣經濟的配慮」が「不當に過小視」される傾向のある事を警戒されつゝ、中世社會の構成上最も重要な素因である都市に重點を置かれるのである。北歐都市が團體としての臣從關係に立ちながら、市民の自由・自治・自衛を獲得して行く所に中世社會の一方の特徴を示されつゝ、經濟的社會構造に於いては（ヘリトリウムは別として）斷絶があるけれども、精神的には此の自主性が近代的精神の母胎をなしたと考えられて居る。氏の此の様な齟齬點に關しては、近世の側からヨーロッパ史を見ようとする者にとつて更に一層實證的な研究を期待し度い問題が含まれて居るのではなからうか。しかも「自己形成的な創造物」・「家計單位」・「特殊法域

」としての北歐型都市を以て中世市民意識の特色の現れとされる著者が、その精神的基礎を「キリスト教的休戰思想」に求め、「復讐と相互扶助の精神につらぬかれたゲルマン的・擬似民族的なる團體意識を百八十度轉回せしめ、リファインせしめて、眞に中世的なる思想に轉生せしめた」所の「日常生活に即してのキリスト教化」を重視されるのであるが、團體としての都市の有機的運動と、その意識を擔つたギルド商人の世俗的生活感情と宗教心の榮相が更に深く追及される事が希望されるのは初學者のうらみであらうか。マツシージな意識、精神の問題が歴史的生成の中に於いて把えられようとする時、そうした面は概括的に處理されがちであり、而も實證に際しては極めて煩雜困難を伴うものと思われるが、中世の普遍的精神世界を支配したキリスト教の意義を思う時、その市民生活への滲透と日常生活との融合の面も解明指示されることを望んでやまない。

次に本書の更に大きな特色として注目

さる可き點は、これ等の諸論説が單に著者の専門的關心からのみのものであるのではなく、日本や・東洋の歴史的構造に對しより廣い關心を持たれつゝ、謂わば世界的構想への手懸り乃至は準備として書かれていると云う事である。此の點に關しては本書の序言及び補論に著者自らが強調され、又行間に屢々その意圖が反復され提示されて居り、最早駁辯を要せぬ所であろう。しかも著者が、最近我國の史學界に流行している所謂社會經濟史的研究に屢々見受けられる所の史觀の一面性という缺陷を意識され、その死角を満たす念願を抱いて居られる事に對し、深い敬意を表することを禁じ得ない。

時代區分の問題を中心とする西洋史學の新しい體系づけと、東洋との關聯のもとに謂わば普遍的に設問の解明を企てられる著者の意圖に對し、我々は暗示を受け且つ學ぶ可き多くのものを見出すのである。その意味に於いて本書は著者の長年に亘る研究の凝結された成果であると同時に、氏が自ら言われる如く新たな

研究出發への指針でもあろう。そして此の様な設問の解明に際して我々は、「史料への沈潜」を通してヨーロッパ的個性の一貫した體系づけを念願せられる著者や上原氏の道と、鈴木成高氏に於いて勝れて見られる所の問題史的立場の斷えざる反省と再構想の態度との兩者に書き指範を見る事が出来るのではなからうか。

(昭和二十四年五月春秋社刊Aう二二四頁二五〇圖) — 阿部健彦 —